

# 明恵上人に於ける浄土教菩提心説の基調

專攻科 稲垣良徹

仏教の中には、自ら此の世界に於て修行して成仏しようとする教と、仏力によつて浄土へ往生し浄土に於て成

仏しようとする教とがある。この二つの教は自力他力

此土成仏と浄土往生という違いはあるが、共に仏教である

の限り成仏を以て終極の理想としていることは同じである

。而して成仏すると言ふのは仏果菩提を得ることである

から、菩提心が最初の関門であることは言うまでもない

。然るに元祖法然上人は、發菩提心と言ふような諸行

はさしおいて専ら本願の念仏を称えるようにとすすめら

れた。それは兎も角として、發菩提心を彌陀の本願では

ないから諸行であるとして斥けられたことが問題であつ

て、一般的に考えれば、菩提心を否定するならば仏教の

根本出发点を無視することになるから、明恵上人が憤激

して論難の叫びをあげられたのは当然と考えらる。然

しそれは明恵上人の立場が実は元祖とは本質的に異つて

いたことによるものであつて、そこに我々は元祖の立場

が全く未曾有の革新的なものであり、仏教界に比類なき  
独自のものであつたことを感じさせられるのである。

さて明恵上人が元祖の教えに對して批判の矢を放つた  
書は摧邪輪及び摧邪輪莊嚴記の二部四卷であるが、その  
主張の眼目は畢竟菩提心を以て往生浄土の行とするか否  
かに關するものであつた。故に本来ならば元祖が菩提心  
を諸行として斥けられたことの方に重大な意味があるの  
であり、何も明恵上人のみが特に菩提心を強調したと見  
るべきではないが、それにしても大乘仏教一般に於て菩  
提心が如何に重んぜられているかを知るものでなければ  
そうした論難はおこらぬ筈である。

そこで先ず華嚴宗初め諸宗の菩提心について元祖がど  
のような見解を持つておられたか、又明恵上人は華嚴宗  
の菩提心をどのような書物から見ておられたかを考へて  
みたい。漢語燈錄の諸宗經疏目錄の中には、華嚴、天台  
三論、法相、地論、摂論、大乘律、真言、成実、俱舍、

四分律等十一宗について、それらの宗派で学ばねばならぬ重要な書物があげられているから、各宗でそれがどのようなに重要なものであるかを元祖は十分御承知であつたに違いない。選択集第十二章では「発菩提心とは諸師の意不同なり」と言つて、天台・真言・華嚴・三論・法相及び善導の名をあげて、同じように菩提心と言つても宗派によつて意味が違うが、自宗の一説だけにとらわれて他のすべてを斥けてはならぬ。往生を求める人は自宗の菩提心を発すようにと言われている。然し、持戒と菩提心と理観と読誦大乘とのこの四行は当世の人が殊に欲する行であるが、それらの行を以て念仏を抑えようとするのは念仏の一行を後代へ付属流通せられた釈尊の本意ではないと申された。それ故元祖からすれば、発菩提心も自分の願行である限りそれが往生の行とならぬと言うのであるが、この場合、華嚴宗の菩提心については、「彼の菩提心義及び遊心安樂道等に説くが如し」と言われている。元祖が特にこれを華嚴宗の菩提心の証拠とし引用せられた所から考えるに、元暁の遊心安樂道は如何にも浄土往生をすすめる書であるが、それは華嚴宗の立場で

あつて、浄土宗の立場とは異なることをはつきり示そうという御考えがあつたかも知れぬ。今一つ元祖が、遊心安樂道と並べて挙げられた菩提心義と言う書はどういう書であり、又誰の書であろうかと言うに、從來諸説が区々にわかれていて、中には五大院安然の著した菩提心義であるという説がある。然し、五大院安然の菩提心の撰述であるから、これを元祖が華嚴宗菩提心義の証とされる筈はない。そこで私は、それは賢首大師の著された発菩提心章のことでないかと思う。賢首大師法蔵の著述である華嚴發菩提心章一卷は大正藏經の第四十五卷諸宗部の中に収められて現存しており、その書の初めについている凡例によると、この書は梅尾高山寺や奈良等に善本が存在していて、高山寺藏書目錄を初めその他古来の目錄にも賢首大師の撰述とされているという。そうして見れば元祖も明恵上人もこの書を見られたことは全くまちがいないと言つてよいであらう。そこで明恵上人の摧邪輪莊嚴記を見ると、

『又香象大師造發菩提心章顯發心相用起信論三心開此

### 三心各用十門釈之

## 明恵上人に於ける浄土教菩提心説の基調

と説かれている。今大正大藏經に収まつてゐる發菩提心章をみると、いかにも明恵上人が言つておられる通り、起信論の直心・深心・大悲心と言う三心によつて菩提心を説いてゐるのであるから、現存する菩提心章を明恵上人も確かに華嚴宗の祖師賢首大師の著述であるとして読んでおられたことが知られる。明恵上人はこうして賢首大師の發菩提心章を読んでおられたが、賢首大師の師匠である至相大師智儼の發菩提心章をも度々引用せられてゐる。では至相大師の發菩提心章とはどう言う書かというに、これは単独で一冊になつた書物でなく、華嚴經の中の諸問題百四十一門を解釈せられた華嚴孔目章という書の一章であつた。即ちそれは華嚴經第六卷賢首菩薩品の偈頌の中で菩提心を發することの極めて重要なことが説かれてゐるので、至相大師はその經文を解釈しようとしてこの發菩提心章という一章をたてられたのであつた。次に元曉師の遊心安樂道は、それが華嚴宗の人でしかも浄土願生の人であつた点から、同じ華嚴宗の明恵上人が摧邪輪中屢々引用せられてゐるのは当然である。至相大

師や賢首大師は華嚴の祖師であるが、浄土願生のはつきりした証拠がないから、これらの高僧方の著書を選択集に對する論争の書に引用しても力が弱い。それ故、浄土教の立場から言つても菩提心を斥ける理由はないということを中心とする為に、明恵上人は善導大師の觀經疏と元曉師の遊心安樂道とを深く研究せられたと考えられるのであつて、このように見て来ると、元祖は元曉師と善導大師とは立場が違ふとせられてゐるのに對し、明恵上人は元曉師と善導大師とは同じ立場であると力説してゐるように思われ大変興味深く感ぜられる。結局、華嚴宗の學をしながら浄土往生を願つておられた点で、明恵上人は元曉師に甚だ近い立場であつたと考えられるが、この点は尚今後思想の問題に入つてもつと深い研究の上でたしかめたいと思つてゐる。

次に浄土教の菩提心について明恵上人の考えを少し述べてみよう。

上人によると菩提心というは、仏果の一切智を求める心を起すことである。一切の仏法はみなこの心から生ず

るのであるから、淨土宗のものと雖もこの菩提心を起さないで往生は出来ぬのであつて、既に善導大師も、道俗時衆等各發無上心等と言つて菩提心が往生の正因であるとしておられるのである。では菩提心はどのような菩提心であるかと言うに、發菩提心には緣發心・解發心・行發心・體發心の四種あるが、淨土教で發す菩提心と言うは最も初歩である所の緣發心である。即ち仏果菩提を仰いでそれを求めようとする心を發すのを指し、これは他の發心に比して最も低くまだ菩薩の位に入らぬ時の發心である。一體菩提心とは自性空を内容とするものである。即ち法無我の理にかなつたものが菩提心である。では我々のように未だ法無我の理を知らぬものが、どうしてこのような菩提心を發すことが出来るかというに、行者が衷心から仏果を求める心を起すならば、たとえ自分で法無我の理を知らなくても、その仏果を求める心は既に法無我の理を所依としてゐる。それ故菩提心の高い低いの不同はあつても、その点に變りはない。これについて聖道門と淨土門とでは起す所の行が異なるから、その修行を起す菩提心にも相違があるであらうと考えるかも知れぬ

が、起される行は違つていても、どちらも菩提涅槃を求める点は同じであるから、その菩提心の体に差別はない。淨土門の人師たる善導や道綽等の諸師が皆無上菩提心を以て正因として特別な菩提心の體性をあげていないのはその為である。宗派によつてその説く菩提心に深い菩提心と浅い菩提心とあるが、それは浅深の差であつて菩提心そのものの體性に違いがあるというのではない。あたかも海に浅い深いの不同はあつても、海水の味は同じであるのと同様である。と述べておられる。明恵上人は元祖の選択集が菩提心を以て諸行の一行とし淨土往生の正因とせられなかつたのを痛烈に非難せられたが、その主張の根柢は實にこうした菩提心觀に立つものであつた。選択集は菩提心によつて起された行を捨てよと言つてゐるのでなく、菩提心を一つの行としてゐる。これは到底許すことの出来ない誤りである。と明恵上人は非難された。要するに明恵上人の菩提心思想は今言つたような点が核心をなしてゐるのである。

明恵上人の摧邪輪及び摧邪輪莊嚴記は、摧邪輪の初めに挙げられたような二種の大過、即ち菩提心を捨て斥け

られたことと、聖道門を軽んぜられたこととの二つに結  
 帰する。このことは明恵上人の論旨の要点であると共に  
 又以て元祖の立場の特色をも發揮するものであつて、菩  
 提心を諸行として捨てられたからこそ、浄土門他力往生  
 の信仰が確立したのであり、若し菩提心を発すことの必  
 要を主張されたならば他力の教えは起らず、浄土門と聖  
 道門とを区別されることにもならなかつたであらう。浄  
 土門と聖道門と區別されたのは、浄土門でなければ成仏  
 出来ぬと言う意味であつて、浄土門でも聖道門でも成仏  
 出来るからどの道を取つても隨意であると言う意ではな  
 い。元祖としては決して聖道門を軽んずると言うのでは  
 なく、聖道門では自身の成仏は望めないと信ぜられたた  
 め、菩提心を必要とする聖道門を捨てられたのであつた。  
 それ故元祖は菩提心を発すのは聖道門であり、浄土門は  
 本願力によるから菩提心を必要とせぬと言うのであつた  
 が、明恵上人は浄土門も聖道門も共に菩提心が基礎であ  
 るとせられたのである。ここに両上人の考え方に根本的  
 相違があるが、その相違は更にその本を溯つて言えば、  
 共に浄土門と聖道門という語を使つておられてもその内

容が全く異つていた。元祖は自分は浄土門でなければ成  
 仏出来ぬという信念に立つての二門であるが、明恵上人  
 は一般に人は浄土門と聖道門とどちらによつても成仏  
 出来る筈だという考えに立つての二門であつたと考えら  
 れる。そうしてみればこれは結局自己の機に対する自覚  
 の問題になると言つてよいではないであらうか。浄土教  
 はこのように考えてくると、機の自覚をはなれては全く  
 成り立たぬことが痛感されるのである。

